エジプト学者の来日

加　藤　一　朗

本小稿は去る５月来日されたオックスフォード大学のエジプト学者、ベインズ教授（Dr. John Robert Baines,1946年生れ）の紹介である。

近年わが国においてもエジプト学を志ざすものがふえていて、その数は30名をこえていよう。しかし、エジプト学が正式の講座として置かれている大学がないこともあって、海外の一線級のエジプト学者の来日はまれである。筆者の知る限りでは、1983年来日されたフランスのＪ．ルクラン教授とポーランドのＫ．ミスリーヴィーツ教授につづいて３人目である。ルクラン・ミスリーヴィーツ両教授については、当『阡陵』の第８号の中に「二人のエジプト学者」という題で紹介してあるので参照されたい。

さてベインズ教授は見るからにエネルギーに満ちたシャープな感じの方で、その研究は多岐であり、古代エジプトの歴史の各時代にわたっているだけでなく、言語・宗教・美術の研究を含めるエジプト学の全分野を網羅したものである。サッカラとアビドスで発掘・調査を行ない、発表した論文は50をこえる。文法・文献学者ガーディナー（Sir Alan Gardiner）やピラミッド学者エドワーズ（I. E. S. Edwards）亡きあと、現在イギリスのエジプト学界を背負ってたつ１人といって宜しいであろう。日本滞在は約２週間であったが、東京・名古屋・伊勢・京都・奈良を訪れ、この間に４回の講演（題名は「古代エジプトにおける王権」、「古代エジプトの神殿」、「中王国時代の彫刻」、再び「古代エジプトの神殿」、いずれもスライド使用）を行った。幸いにして筆者は、京都において２日間にわたり教授と行を共にし、エジプト学の万般について個人的に話し合う機会をえた。教授が来日中もっとも関心をもったのは京大博物館のエジプト資料の展示であった。将来の研究のためということで、ここでは展示品の多くを写真撮影し、展示品の英文説明の誤りを正したりしたが、ここで１つのエピソードが生まれた。つまり、ビーズを編んだ装身具を一目見て「この編み方はエジプトのものではない」といいだしたことである。この見学に立合っていた小野山節京大教授によると、「実はこの装身具は一度糸が切れてバラバラになってしまったのを、われわれの手で、編みやすいようにつないでおいたのです」ということであった。ベインズ教授の炯眼に敬服した次第であった。

ベインズ教授（オックスフォード大学）

さて筆者が教授と種々議論したことの一端をここに書きとめておきたい。断片的な叙述になるが。

１．ヒエログリフの研究法について。ヒエログリフを学生に教える場合、筆者はずっとガーディナーの文典をテキストとして来た。これは長くエジプト学のバイブルとよばれてきたほどのものである。ところが最近ガーディナーはもう古いというエジプト研究者が現われてきた。この点筆者はとまどっていたので、教授の意向をたしかめた。教授からは「たしかに動詞に関しては、Ｈ．Ｊ．ポロツキーやＪ．チェルニーの説に耳をかたむけなければならないが、彼らの研究はまだ体系的な書物として刊行されていないので、ヒエログリフ全般の入門書としてはやはりガーディナーの文典によるほかない」という答えが返って来た。そこで筆者は、少くとも当分の間は、初心者にガーディナーの文典をすすめて宜しいのだという認識を新たにした。

2．ファラオ（王）の神性について。筆者はかねがね、古代エジプトではファラオが単に政治的支配者であるばかりでなく、あらゆることの中心、たとえば文化の光源でさえあると考えてきたが、教授によれば、「ファラオはエジプト社会のセントラル・インスティテューション（制度的中心？）である。国家は王権なしには考えられなかった。王は神がみよりも重要であった」ということであった。この点２人の意見は完全に一致した。そしてまた、God-King（神王）としての支配者の性格はエジプトのファラオとわが国の天皇にもっとも端的に表明されていると考えられるわけで、教授が短い滞在の間に伊勢神宮に参拝したのも、このような思いがかげにあってのことと思われる。教授の頭の中では、エジプトの初期の、恐らくは木造であった神殿と伊勢神宮とが比較されていたにちがいない。

3．「神」を表わすヒエログリフについて。小さな問題点であるが、ゲルゼ期（先史時代末期）の装飾土器の図柄によく見られる船の、２本のリボンをつけたマストが、歴史時代のヒエログリフのネチェル（神）を表わす文字の前身であるということでは、教授と筆者の意見が一致した。これは心強いことであった。というのも、異説がないわけではないのであるが、筆者はつねづね「ネチェルの起源はリボンのついた船のマスト」という風に学生諸君に教えてきたので。

4．ナルメル王の石パレット（写真）について。わが国の場合、邪馬台国論争などに見られるように、日本国家の起源については、未詳の部分が多い。それが、古代エジプト王国の出発点に関しては、私見では、非常にはっきりしている。ヒエラコンポリス出土のナルメル王の石パレットが、あまりにも明白に統一王国の成立を物語っているように思われるからである。ナルメル王の石パレットは、――碑文的というよりもむしろ絵画的にではあるが――その裏の面では、上エジプト出身のナルメル王が、上エジプト王としての冠（白冠）をつけて、下エジプト人を討伐している姿で描かれている。そして表の面では、すでに下エジプトを征服しおえた同王が、下エジプト王としての冠（赤冠）をつけて凱旋（がいせん）式を行なっている。ここに――前3100年ごろの

ナルメル王の石パレット　（左表）　（右裏）
高さ　約90cm

ことであるが、――上・下エジプトの統一はなり、世界に先がけて統一王国が成立し、初代のファラオが出現したものと考えられるのである。それほどこの石パレットの印象は強烈で、筆者はこの石パレットを「建国の碑銘」ととして学生諸君に紹介して来た。この点において、ベインズ教授の発言は微妙なところで、筆者の見解と異っていた。つまり、赤冠の形象はすでにゲルゼ期に先立つアムラ期に現われていること、いいかえるなら、王権の起源はそこまでさかのぼって考えられること。ゲルゼ期には、少くとも文化的にはエジプト全土にわたって統一性が看取されること。このころのものとされるヒエラコンポリス出土の壁画やゲベル=エル=アラク出土のナイフの柄に見られる戦闘の図は統一戦争を表わしていること。等々の考古学的証左から、教授は、ナルメル王は第１王期の初代の王というよりも、その前のものと推定される０（ゼロ）王朝の最後の王と見るべきで、石パレットの「征服の図」は「同王の先祖の王たちが描いた同様の図柄をそのまま模倣したものである」と主張した。「そして、その様な模倣はエジプトではしばしば見られるものである」ということであった。実は筆者自身、かつて『古代エジプト形成期の一側面』（足利惇氏博士喜寿記念オリエント学インド学論集、1978、の中）という小論で、先史時代の諸石パレットに見られるライオン、雄牛の姿が王権のシンボルであると指摘したのであったが、ナルメル王の石パレットの図柄が前代のものの模倣であるという推論は思ってもみなかったことであった。